

♪東京アコーディオン研究会 内部発表会♪

アコ研こと東京アコーディオン研究会の内部発表会が4月4日(日)15時から17時、練習会場にしている新宿区牛込筆筈町地域センター5階のコンドルにて行われました。

昨年同時期の予定がコロナ禍の影響で延期、今回に至りました。未完成でも全然OKと言うことで実施。気軽に演奏とは思うものの緊張する時間でした。お客様は身内2名様。

ソロ8名13曲、デュオ2組3曲、合奏6名1曲。

《プログラム順に》

・磯部・鎌田のデュオでオープニング。「1. チュイルリー公園にて 2. Jolly Caballero」の2曲。「チュイルリー公園にて」は宇佐見・百瀬ペアも取り組んでいますが、今回はこのお二人の演奏。

・江頭恭子「サウンド・オブ・ミュージック」

・磯部裕子「Reine de musette (ミュゼットの女王)」

・中村旬子「1. ソナチネ クレメンテ作曲 V.アーベンナイネン編曲
2. ドミノ L.フェラーリ作曲 青山義久編曲」

・鎌田千津子「Olive Blossoms」

・村上一郎「1. 帰って来たつばめ 2. ビア樽ポルカ」

・百瀬まなみ「1. パリの空の下 2. 中島みゆきメドレー」

・江頭・鎌田デュオ「チロルの祭り」

・渡部美代「バガunden Swing」

・高橋孝一「1. アインザマーヒルテ 2. メモリー 3. チロルの手風琴」

最後に柴崎和圭先生の指揮で「日本の四季(浜名政昭編曲)」でした。この曲は「春よ来い・我は海の子・小さい秋見つけた・雪やこんこん」の4曲のメドレーになっています。最後に柴崎先生より「これが最後ではなくスタートです。間違ったところは直す。そして場慣れが必要。発表の場は関東アコーディオン演奏交流会もあるから全員出たらいい」と感想をいただきました。

アコ研は故浜名政昭先生の手書きの編曲作品をデータ化すべく日々頑張っています。聴いていただける日が待ち遠しい限りです。

記 村上一郎



合奏「日本の四季」
演奏後ほっとしたひと時の様子
(写真：主催者提供)

ジャズピアニスト チック・コリアを想う

ジャズピアニストの巨匠と言われたチック・コリア氏が本年2月9日に79歳で亡くなられた。

関東アコでも、昨年は30周年記念コンサートに向けてアコーディオン大合奏「スペイン」(編曲: Rulf Schwarzien) 指揮・指導(柴崎和圭)で3月8日の本番直前まで練習を重ねていたけれども、新型コロナウイルス感染拡大に伴って中止となり、悔しい思いをしました。

準備していたプログラムに「スペイン」について次のように載せていました。

《イントロに「アランフェス協奏曲」より第二楽章 adagio のメロディーが使われていて、次第にルンバなどのキューバンリズムで景気よく進んでいきます。最初はゆっくりです。この「アランフェス協奏曲」はホアキン・ロドリゴが1939年に作曲した曲で、ギター協奏曲です。ギターによる独奏とオーケストラで演奏されます。

アランフェスはスペインのマドリードの南にある都市で、当時の内戦で被害を受けたことから、この曲には平和への願いが込められていると言われていて、また、病気の妻や失った子どもに対する祈りが込められているとも言われている。》

30周年記念コンサートは、昨年3月8日開催予定だったので、実現していればチック・コリア氏の存命中に演奏できていたことを想うと残念です。

筆者は、ジャズには疎いのですが、チック・コリア氏がどのようなミュージシャンだったのか、新聞に載った追悼記事からその一端を知ることができました。

日本経済新聞 2021年4月4日(日) 17面に寄稿された吉田俊宏氏の言葉を借りると、(以下一部転記)

《彼は、1941年6月、米東部マサチューセッツ州チェルシー生まれで、日本人ピアニストの上原ひろみさんと日本武道館で共演するなど、晩年まで活躍されていた。

彼は、エレクトリックピアノを弾いていて、従来の4ビートのジャズから逸脱し、ラテン音楽を取り入れた開放的な明るいサウンドは、ジャズファン以外にも歓迎された。アルバムには、明るさの中に深い陰影を持つ曲が並んでいるのに、聴き心地が良いのはなぜだろうか。

思い当たるのは、旋律の美しさだ。チックの生み出すメロディーは生きる喜びにあふれている。(中略) この世を信じあなたや私の真心を信じている。「大丈夫、君はそのままでもいいんだよ」と語りかけてくれる。そんなメロディーだ。人間賛歌というべきか。チック・コリアはとてもロマンチックな人だったのだと思う。》と記している。

(文責: 広報部)



昨年2月(第6回目)の練習の様子。
参加の皆さんお疲れさまでした。
会場: スタジオフォー